

2018年 2月8日

### 博士学位審査 論文審査報告書 (課程内)

大学名 早稲田大学  
研究科名 大学院人間科学研究科  
申請者氏名 瀧音 大  
学位の種類 博士 (人間科学)  
論文題目 (和文) 原始・古代日本における勾玉の研究  
論文題目 (英文) A study on comma-shaped beads in primeval and ancient Japan

#### 公開審査会

実施年月日・時間 2017年12月11日・13:00-14:00  
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第一会議室

#### 論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位 (分野)	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	谷川 章雄	博士 (人間科学)	早稲田大学	考古学
副査	早稲田大学・名誉教授	蔵持 不三也	博士 (人間科学)	早稲田大学	文化人類学
副査	早稲田大学・准教授	原 知章	博士 (文学)	早稲田大学	文化人類学

論文審査委員会は、瀧音 大氏による博士学位論文「原始・古代日本における勾玉の研究」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

#### 1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

- 1.1 九州の縄文時代後期に萌芽がみられる弥生時代の刻み目勾玉は大陸の影響かという質問に対しては、現状では確定できないという回答があった。
- 1.2 「記紀」の崇神天皇条の勾玉の記事をどのように位置づけるか、ヤマト政権による丁字頭勾玉に関する規範を裏付けるものは何かという質問には、文献資料との対応は不明であるが、丁字頭勾玉が畿内中心に分布し、出土量が限定的であることから、ヤマト政権による規範の存在を推定したという説明があった。
- 1.3 背合わせ勾玉の意味をAグループ「分裂」とBグループ「緊縛・結びつける」に分けているが、これは明確に分けることができる観念なのかという質問に対しては、Bグループ「緊縛・結びつける」が古墳の埋葬施設に設置される石枕の装飾「立花」の系譜

につながるどころから、そのように解釈したという回答があった。

- 1.4 土製勾玉を「より地域の人びと生活に密着するかたちで使用されたもの」としているが、どういうことかという質問については、土製勾玉は祭祀遺跡や竪穴建物跡から出土するものが多く、畿内に少なく在地的であることが説明された。
- 1.5 勾玉から日本の国民性を究明するとしているが、より広い視野が必要ではないかという意見に対しては、アジア圏という視野が必要であることは本論文でも触れており、今後の課題としたいという回答があった。
- 1.6 勾玉の変遷や地域性がどのような社会の変化を背景としているのかという質問に対しては、本論文をもとに今後さらに歴史的解釈を精緻に積み重ねていくという回答があった。
- 1.7 以上のように、公開審査会において行われた質疑応答では、申請者は質問に対して適切に回答していたことが認められる。

## 2 公開審査会で出された修正要求の概要

2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1 英文タイトル Study of a comma-shaped bead in primeval and ancient Japan に対する質問と修正要求が出された。

2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1 英文タイトルを A Study on comma-shaped beads in primeval and ancient Japan に修正した。

## 3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：勾玉は縄文時代から中世に至る長い歴史をもち、日本列島における文化的、社会的、宗教的な背景を有する遺物である。本論文は、日本列島の遺跡から出土した勾玉を集成して分析対象とし、列島全体の勾玉の変遷と地域性を明らかにするとともに、各時代に特徴的な勾玉の変遷と地域性に関する分析を重ね合わせ、日本の原始・古代の勾玉の様相を明らかにすることを目的としたものである。このような全国的な視野をもち、全時代を通じた勾玉に関する考古学的研究は、勾玉研究の基礎的かつ重要なものである。したがって、本論文の研究目的は明確であり、かつ妥当なものであると言える。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文では、日本列島の遺跡出土の勾玉を発掘調査報告書から集成した。集成した勾玉は2万点以上にのぼり、形態・材質・出土状態・時代・分布などの項目をとり上げた。そして、列島全体の勾玉の変遷と地域性を明らかにし、各時代に特徴的な勾玉の変遷と地域性に関する分析を加えている。考古学において遺構・遺物の集成作業は、これまでも多くの成果を上げている基本的な方法であり、本論文の方法は考古学の方法論として、明確かつ妥当なものと判断される。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文では、日本列島全体の勾玉について変遷と地

域性を明らかにするとともに、縄文時代から弥生時代の刻み目勾玉、弥生時代から古墳時代の丁字頭勾玉、古墳時代の背合わせ勾玉、縄文時代～中世の土製勾玉という特徴的な勾玉の変遷と地域性を合わせて分析した。その結果、列島の勾玉の歴史的、文化的様相について、①縄文時代早期～中期、②縄文時代後期から晩期、③弥生時代前期～古墳時代中期、④古墳時代後期～終末期、⑤奈良時代～平安時代、⑥中世という時期区分を行なった。こうした本論文の成果は、資料に立脚した明確な論旨に貫かれており、妥当なものと判断される。

- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
- 3.4.1 日本列島の縄文時代から中世に至る遺跡出土の2万点以上にのぼる勾玉を収集した研究であること。
  - 3.4.2 全国的な視野をもち、全時代を通じた勾玉に関する考古学的研究であること。
  - 3.4.3 日本列島の勾玉の歴史的、文化的様相を6期に時期区分したこと。
- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。
- 3.5.1 縄文時代から中世に至る長い歴史をもち、また様々な歴史的背景を有する勾玉の研究は、日本列島の文化、社会、宗教史を究明する上で大きな意義がある。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
- 3.6.1 日本列島の文化、社会、宗教に根ざした勾玉の研究は、今後の人間科学における物質文化研究の出発点の一つとなる。

- 4 本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

#### 学術論文

瀧音 大：2009 北海道出土の勾玉について。駒澤考古，第34号，55-79頁。

瀧音 大：2012 勾玉の宗教的性格について。国際経営・文化研究，vol.17 No.1，13-28頁。

瀧音 大：2013 背合わせ勾玉についての一考察。古代，第131号，85-108頁。

瀧音 大：2014 日本における勾玉研究の意義。中華文明の考古学，同成社，400-408頁。

瀧音 大：2016 刻み目を有する勾玉について。玉文化研究，第2号，寺村光晴先生卒寿記念号，105-125頁。

瀧音 大：2017 日本列島における勾玉の分布・遺跡数・材質からみた時期的変遷。文化の遠近法 エコ・イマジネールⅡ，言叢社，309-339頁。

瀧音 大：（印刷中） 丁字頭勾玉の展開と地域性。地方史研究。

#### その他

《学会発表》

瀧音 大：2013 勾玉の宗教的性格について。第14回国際コミュニケーション学会学術大会。

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以 上